

藤本文朗先生インタビュー

「怒り」から科学とヒューマニズムへ

野村 朋

1. 「^{とこ}床に臨む」研究スタイル

藤本文朗先生は自らの研究スタイルを「教育臨床的研究法」と呼び、非行や障害児教育など、実際に悩み苦しむ人の「床に臨んで教育の本質を考える」ことが大切と述べておられます。その内容については滋賀大学の退官記念論集（『座して障害者と語る』）¹⁾に詳しく論じておられます。また、研究態度の原則として、「絶えず現場から学ぶ」ことなどを挙げておられます。今でこそ「臨床」が大ブームで、教育や医療や福祉の現場に大学の研究者が関わって共に研究していくことが珍しくなくなっていますが、藤本先生はその先駆者といえるのではないのでしょうか。

今回のインタビューでは藤本先生の「床に臨んで」「現場に足を運んで」研究し、「自分自身の発達にもつなげて」さらに深めていくという研究スタイルについて詳しくうかがいたいと思います。

一藤本先生は障害児の教育権の問題を掘り下げていくことで、「教育とは何か」ということが浮き彫りになってくる、と言われていました。その中で、現在困っている、悩んでいるといった臨床的な「矛盾」を、周辺のはみ出たこととしてではなく、本質を浮かび上がらせるものとしてとらえることの重要性を指摘しておられます。従来ある理論を使って現実を説明するのではなくて（実証主義）、事例的なことを扱うことによって現実の中から掘り下げていくやり方は学問的には当時ある意味「異端」だったわけで、それを研究スタイルとして作ってこられた経過について詳しく教えてください。

僕らは基本的には「特殊教育」学も、臨床心理学の研究でも、心理学が基礎だったんですね。僕自身のことでいうと、学部時代はもう本当に外国の文献を読んで、それにちょっと工夫しながら追試していった論文にしていくというそういうスタイルですね。心理学はほとんどがそのやり方でしたね。それで学部時代はロールシャッハテストに取り組みました。

修士論文は知的障害児の集団カウンセリングということで宇治の医療少年院に週2回通って半年ほど研究しました。

それでその後僕は心理学を捨てるんですわ（笑）結局、大阪教育大学の助手時代は大阪日赤病院（精神神経科）と、堺市の浜寺病院と天王寺の鉄道病院で臨床心理のアルバイトをしてたんですよ。そこで勉強はさせてもらいましたけどね、お医者さんたちと。結局は臨床心理は医療の補助的な仕事だという意識があって、解釈はするけど創造的な学問じゃないなというのが僕が心理学を離れた理由ですね。

京都大学大学院には、「教育臨床」を研究している正木正先生がいて、滋賀県の信楽学園なんか一緒に連れて行ってもらって障害児の人格性（personlichkeit）の研究をしたんです。一人ずつ面接して、「好きな人は誰か」とか「遠いところはどこ」とか「三つの願い」とか30項目ぐらい作って、人格性についてドイツ流のユニークな研究をやらしてもらいました。いわゆる、大学にすわってやるんじゃないかって、現場にいった研究する、ということでしたね。農村などの現場に行くと、そこで事実をつかんでくるという研究方法は、東京大学の教育学部に昔あったそうです。その流れで正木先生も「教育臨床」という概念を作られたんです。「床に臨んで」「床に悩んで」いる子どもと一緒にものを考えるということです。そして教育の本質（理論・法則性）を考えることです。

2. 研究は「実践」と「運動」を含むもの

「教育臨床」ということは、「床に臨んで」学問の基本を考えるということをや正木先生から学んで、僕はそれを発展させてきました。正木先生ご自身はそのあと実存主義に傾倒されて、問題解決となるとカウンセリングのところまで終わってしまうんですね。教育権なんてことは出なかったです。

臨床的な問題を解決するとなると、たとえば不登校といえは学校カウンセリングだとかいうけども、やっ

ばり学校の教師が中心的に指導してカウンセラーは補助的にやるというのが本当だと思います。不登校の問題でいうと、学校の先生の数が少ない、そのことを解決するほうがカウンセラーを養成するよりは大事だと思います。

僕はその「教育臨床」の方法として、東大阪市で不登校在宅障害児の調査をやったんです。それまでは大学にいて、訪ねてくる人を対象にする、病院にいて自閉症の子どもを診るというやりかただったんですけど、(週に一回)訪問して、家の様子など聞いてみたら、もう自閉症の子なんかは家中に新聞紙がいっぱいになるようなちぎりがたしてたり、ほんとに座敷牢みたいな家もたくさんあったりして、住所がないとか戸籍がない子どもがいた。そのときは調査だけで終わりました。

福井大学時代、鯖江市などで東大阪市と同じ調査をすると、「調査するだけやったら私たちに何にもメリットない」という意見が保護者から出たわけです。それでも「来てくれたのはあんたが初めてや、今までは教育委員会も来ないし、福祉も来ないし警察が物が近くで盗まれたときにくるだけや」といわれました。戦前と一緒にですね、そういう実態を知って、ただ調査するだけでは実際に「床に悩む」人たちに返すものがないということで、「就学させろ」という署名運動をみんなで行いました。それで議会(鯖江市)に提出したら議会のほうは「研究調査中です」という答えが返ってきたんです。

それなら僕らがやろうやないかということで、日曜学校・サマースクールを始めました。学生と一緒に在宅障害児を集めてレクリエーションをするわけです。なにしろ在宅の障害児は日頃は狭い空間にいるわけですから、広いところに連れて行って、山に登ったり、風船上げたりして、そのおもちゃを大学で買ったりしたら「大学で自分の子どものためにおもちゃ買う」というて怒られたりして(笑)「風船の水素買う」といったら化学の先生とまちがわれボンベ1本買ったりしてね。学生と一緒に一月に1回サマースクールやる中で、学校には入学できなかったけど、障害児通園施設が作れたんですね。そういう成果も含めてがんばって、「教育臨床というのは実践や運動も含む」という概念を提起したんです。

今はそれが当たり前になってますけどね。その当時は「教育臨床」自体が正木先生しか言わなかったです

からね。心理学はいわゆる実験心理が主流ですからね。正木先生は「価値」や「内面」とかをいうんですね。そしたらそれは科学の対象じゃないといわれました。学会の中ではあんなモン学問じゃないという人もいました。最近になると評価が違いますけどね。

一心理学では「価値」とか「内面」には触れずに、客観的事実のみを取り上げることに意味があるといわれてきましたよね。特に行動主義の人たちにとっては。

主流派はそうですね。僕らも学部時代(東京教育大学)はそうでした。それが当たり前だと思ってました。

一先生は研究態度の4原則として、「絶えず現場に学ぶ」のほかに、あと三つ、「古典を読むこと」、「外国の文献に当たること」、「研究者集団を組織すること」を挙げておられましたね。

外国文献の必要性ということであれば、僕はソビエト心理学の影響をすごく受けました。ヴィゴツキーの「欠陥学」の文献ですね。ロシア語で一論文だけ訳しました。柴田義松先生に指導してもらいました。その中で弁証法とか、そういう思考を学びました。たとえば「知恵遅れの子どもは知恵が遅れているから、生活を通して具体的に易しく教えるべき(生活単元主義)」というのが当時の障害児教育の流れでしたけど、ほくら「遅れているからこそ、その子に合わせた生活・発達・障害を考えつつ抽象的な思考を養う系統的な教科学的な教育を」という弁証法的論理をヴィゴツキーから学びましたね。「遊び論」なんかも弁証法的な理解ですね。

あと、研究者を組織する(発起人・副委員長『障害者問題研究』編集委員長・顧問)ということであると、全障研(全国障害者問題研究会)ですね。当時の全障研は、入るとレッテルを貼られて研究者になれないところでしたが(笑)

3. 鈴虫のなく京都のご自宅で—藤本先生のバックボーンとなったものは？

一以前、先生は戦争体験を語る手記の中で、自分は戦争中、10歳ぐらいの頃にはやんちゃやったというようなことをかかれてましたね。一それから、軍国主義から戦後民主主義教育への転換の中で「教師とか権威とかを信じられ

なくなり、教師に反抗した」と書いておられました²⁾ (『創発』第7号)。そんな先生が、教育学・心理学に興味を持つようになったのは何かきっかけのようなものがあったのですか？

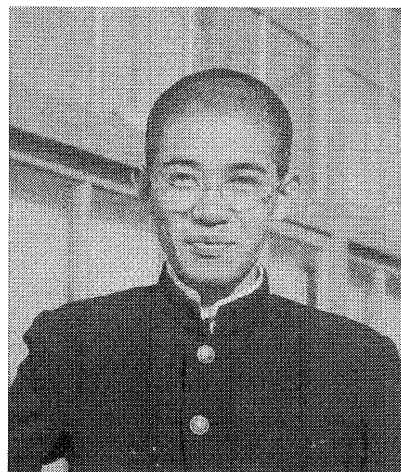
まあ、こんな教育ではあかん、と、小学校の先生になりたかったんですよ。僕は小学校1年生の時にはいわゆる“ご真影”(天皇の写真)を拝んで、日の丸の旗揚げていた時代ですからねえ。先生は絶対でした。戦争が終わった小学校6年生の時にはもう時代が変わっていて、私が運動会の実行委員長やったおぼえがありますねえ。そのときにはアメリカのデューイの教育学=新教育が入ってきました。学校の主人公は子どもやと、子ども会と言うか自治会的なことも小学校でもできましたね。学級委員はそれまでは担任が選んでいたのもみんな選挙して選ぶというようになりました。そういう時代の変わり目を体験しました。

—先生は、そのような転換に対して反発しておられたのかなと思っていたのですが、反抗しつつも実行委員もやっていたんですね。

それもありますけど、基本的には学校の先生は信用できないと思っていました。そういう信用できない教師じゃなくて、自分は違う教育がしたい、と思ったです。それと教育の重要性についても考えましたね。結局、当時の東京教育大学(現 筑波大学)に入学したわけですが、そこに入学してみてもはじめてわかったのは、そこは小学校の教師の免許が取れない、小学校の先生になれないということでした(笑)そこを選んだのは、東京で教育の一番いい大学ということ(笑)それと家からいっぺん家出してみたいということですね。だけどまったく経済的な観念がなくて、僕一人が東京行ったために母親の給料が全部飛ぶ、それが現実でしたね(笑)兄弟は4人いて2人は早く死んでいくわけです。長女と長男がなくなって、次男と僕なんです。

—先生が幼少期に影響を受けた人物や出来事といたら何でしょう？

やっぱり戦争の中の貧困という歴史的な流れですよ。特にこの先生がどうということではなくて。小学



《高校3年生 卒業をひかえて》

校1年生のときに第二次大戦が始まって、3年生のときに京都府の美山町に集団疎開に行き、そこで栄養失調になって4年か5年ごろに終戦になって、貧困そのもので食べるものもなく苦勞しました。その中で、みんなが小さいご飯茶碗で少ない飯を食べているのに、先生だけいっぱい食べているというのが気になって(笑)

父親が龍谷大学の教員で、その父親もアメリカから帰ってきてすぐ教授になって、それで仏典翻訳をやりだしました。母親は京都女子高等学校の生物の先生やったんです。ちょうど丙午で(丙午生まれの女性は気が強く、男を食い殺すなどといわれていたので)貰い手がなくて、お茶の水女子大学を出てて生物学やってたから。しかし親父は死ぬ前に母が気が強く「やはり大変やった」と言っていました(笑)

この家でその母親と父親がいつもけんかしているもんですから僕は2階に上がって勉強するしかなかったのです(笑)

—お母さんはどんな方でしたか？

女性で生物学やっていたのはその時分では珍しかったでしょうね。僕の兄貴も農学をやってますし、僕が障害児教育をやっている基礎には生物学的な基礎があると思います。自然と親しむということで、今鈴虫も飼ってますけど(後ろで鳴いてる)(笑)。時々母親が山に連れて行ってってくれましたね。

両親ともお寺出身です。両親の里に帰ったらお寺があるんですが、そのお墓をお守りしている人が障害者でしたね。富山県の魚津です。そのことはかすかに覚えてます。あえて探せばやはり仏教的ヒューマニズ

ムみたいなものが基本的には、あると思います。

当時、昭和34年に特殊教育学科に入るのは珍しいとか、当時東京教育大学にしかなかったのですが、実を言うとそこは自分で選んだのではなくて、はじめの年は心理学で受けて落第したから、特殊教育学科は少し点数が低いところではいったということですよ（笑）。

—そのときの落第の経験を先生は発達段階における「オドリ場」と表現しておられますね

僕の人生には「オドリ場」は3回あったんです。第1回目は小学校6年生のときに、結核になったわけです。それで留年して、1年遅れたわけです。それまでは大体中くらいの成績だったんですけど、留年したことによってクラスで2、3番に変わったんです。僕は2月生まれなので、そういうハンディがもともとあったのかもしれませんがね。今の教育学でどういう風に考えるかわかりませんが、常識的には教育で均していくというのが論理なんですけど、今の競争教育の中でそれが単純にはいえないような気がしますね。それが第1回目ですね。

第2回目が、浪人時代ですね。このときの予備校というのが非常に面白かったですね。まったく出席は取らないし、みんなまじめに聞いているしね。先生は授業がうまかったね。授業も面白かったし、友だちのつながりも良かったし。みんなで山登ったりして。そのときの友だちとは今でも付き合っています。

3回目は実は73歳のときです。3月31日にやめて、学問を捨て（本は短大の図書館に全部寄付）、3ヶ月間は何にもせんと、毎日寝てばかりいて酒飲んでたんですわ。それがたたって脳梗塞になりました（笑）。バットで3発ぐらい殴られたような。まあちょっとそれで、また勉強せないかなあという（笑）。

まあだから、「オドリ場」ゆうのは時間的な余裕があるというのが条件ですかね。モラトリアムというのはよく言いますが、今の階段を上るような学校教育の中で、ちょっと時間の余裕をもつていうのはすくなくとも必要なんだと思いますねえ。ヨーロッパでは夏休み（バカンス）5週間ぐらいとるのは当たり前だし、大学でも半期ぐらい休学できる制度があるみたいですね。

—これが終わったら次これ、と急かされているみたいな所がありますよね。そういう意味では先生は、小6、浪人、73歳と…

3回の「オドリ場」がありましたね（笑）。望んでなかったわけではなかったですけどね（笑）。

「オドリ場」と「オドリ場」の間の50年間は良く働いたなと思いますね。夏休みとかはなかった。学校に拘束されるということはなかったけど、自分の研究会とかいろんなことで、ほとんど走り続けてきたというイメージです。

4. 「怒り」が学問の出発点

—福井大学時代の組合活動や平和運動へのかかわりがその後の研究の土台を作ったとも言われていましたが、そのあたりをもう少し詳しく聞かせてください。

僕は学生運動はぜんぜんしてないんです。30代で福井大学（教育学部）の養護学校の教員養成コースで講師で入ったときに組合活動やって、30代は組合活動の専従のように授業のときだけ出て、後は組合事務所にいるという（笑）当時は大学の教員も日教組に入っていて、ストライキも3日間ぐらい打つという、警察が入ってきて大変な時代でした。その時は半分は研究は放棄してましたね。組合活動というのは地域の平和運動（ベトナム反戦運動など）とかいろんなことに関わっていきますから、平和委員会にも入っていました。そういうことで地域を巻き込んでやっていくという運動論みたいなことが教育臨床の概念の中に入っていたと思いますね。裏では土台を作っていたということですね。自分にとっては長い目で見れば役に立つことをやったなと思います。

—大学の先生が研究者として、地域の活動に参加したり、社会的な役割を果たしていくということへの戸惑いや抵抗はなかったんでしょうか？

その辺はね、野人的なところがあるんでね（笑）。どっかの会社の労働組合がつぶされそうやといえば僕が乗り込んで行って、“大学の先生が来た”って、福井新聞や福井放送などで有名になりました（笑）。デモなんかのため、僕が警察に届出を出しに行くからね。

—しかも国立大学の先生が（笑）必要とされるところには行くというのが先生のスタイルですね。

そうですね。地域から要求があったら。怖いもん知らずでしたね。労働組合もありましたしね。

—「野人的なところ」というのは先生の中には「許せない」とか「これは正義」とかそういう…

あるといえばそれは「けしからん」と思えば何でもやるという。僕は怒りが学問の源だと。なんでも出発はそれだと。方向が決まったら僕はそれを後輩に譲ってしまうから、みんなに怒られてますけど（笑）。

—全障研（全国障害者問題研究会）や科障研（科学的障害者問題研究会）は同じ時期だったんですか？

僕が京都に来て全障研の全国大会があって、科障研は1979年の国際障害者年が始まる前の年です。京都の組合で研究会を作るといことで、科障研を田中昌人先生たちと僕とが代表で作ったんです。そこでとりくんだのはベトナムのことですね。79年に全障研全国大会（立命館大学で）の事務局をやった後、「なんか面白いことやろう」といことで『障害者問題の100年先』という話が出て、「トマス・モアのユートピアではどうなってるか」とか「空想社会主義ではどうなってるか」とか、「100年先の障害者を見るにはどういことが必要か」とか、そういうことを夜通ししゃべって、最後の結論が飛躍的にベトナムになって、「アメリカを打ち破った国」「日本が侵略した日（加害責任）」「戦争と障害者」「社会主義」「アジアの発展途上国」の5つをキーワードにして、みんなで行こうやないかと、清水寛先生、加藤直樹先生、茂木俊彦先生と京教組のメンバーと20何人かでベトナムに1週間行ったんです。

半分は祭り上げられて僕が団長になりました。ベトナム語を勉強して挨拶したけど、ぜんぜん通じなくて（笑）。自閉症はいるかとか聞いて、みんなに「そんなことばかり聞くな」³⁾と怒られました。まだ“ベトちゃんドクちゃん”は生まれていなくて、中越戦争のあとでした。ハノイの近くで子どもにインタビューして「大きくなったら何になるか」ってきいたら、「中

国をやっつける」って言ってました。いいところをバァッと見るだけでしたが、戦争との関係なんかはよくわかりました⁴⁾。ベトナム戦争が終わってまだ4年ぐらいでしたから。

それでベトナムに関心を持って、1985年に文部省の在外研究員として3ヶ月留学したわけです。日本人留学生の第1号だったらしいです。かつて行ったことのあるところをたずねてもっと深めようというのが基本でしたけどね。そのとき、1985年2月28日に当時4歳の結合双生児“ベトちゃんドクちゃん”に会い、2人にあった特製車イス作りを頼まれたわけです。そこでたまたま居合わせた商社マンに二人の写真を見せると「先生、こんな子を生かしていても何になるんですか」と言われてまた、「怒り」がうまれて、その後の研究活動につながったわけです。これも怒りの科学です。



《2000年7月 ドクさんとタン医師と》

—先生の「怒りが出発点」、「間違っていることは許したらあかん」といのは

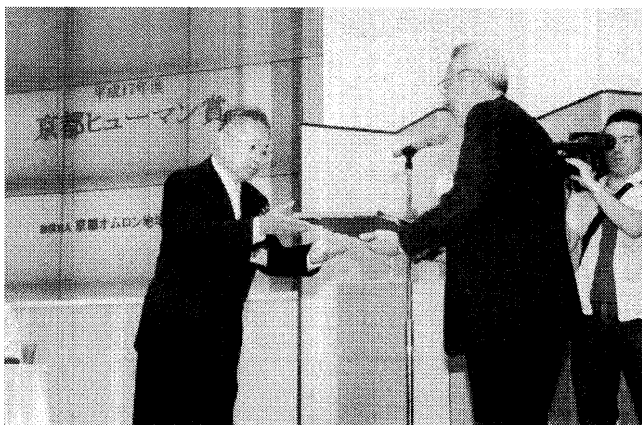
労働組合で鍛えられたですね。

5. 「怒り」から科学とヒューマニズムへ

—「怒り」から出発して、それをそのまま運動に展開することにとどまらず（それはそれで大切なのですが）、「研究する」ことにつなげていくところに藤本先生の哲学があると思うのですが、先生にとって「研究する」といのはどういうことなのか。教育や福祉や保育の分野の21世紀の研究者たちへ伝えたいこと、大切なことなど、をお聞かせください。

福井大学時代からポワン・カレというフランスの研

研究者のいった「仮説の仮説を疑え」という、今までの常識といわれる仮説、その仮説を疑えというのが僕の一つの哲学ですね。心理学では仮説を検証したら終わりですが、障害の重い子どもの不就学というのは、かつては常識になってました。お医者さんが「この子は不就学が適当だ」といって、それで1970年代には2万6000人の学齢児の教育権が奪われていったわけです。そういう常識とされていたことを、それは常識ではないと明らかにしていくことが研究だと思います。



《『2005年 京都オムロンヒューマン大賞授賞式』》

大学で障害児教育の分野に進んだのは、心理学科よりも点数が低くてもいいという（笑）ことで入ったわけですが、入ってからはまた「怒り」で…「仮説の仮説を疑って」「怒りを原動力」に、「野人的に」やっけていく、そして社会を変える「実践」と「運動」も含めてやるのが研究と僕は考えています。

とはいっても研究と実践や運動とは相対的に独立していて、混同してはいけない部分もあります。研究というのはもっと先を見通したことが必要だと思う。実践を整理して運動の方向性を示すところまでやるのが学問だと思います。そして運動は現実的です。

福祉は学問としてはまだまだこれからだと思います。その原因は政府が力を入れてないことにありますね。それから、73歳の僕が一番言いたいのは、国立大学に介護福祉士養成がないこと。また「怒り」ですね（笑）ベトナムの国立大学のサイゴン大学にこの学科を作る支援をして、逆に日本でも「国立大学」でぜひと考えています。

一大阪健康福祉短期大学では、子ども福祉学科の学科として3つの方針、①発達について科学的に認識できる、②障害児保育の視点を持つ ③集団づくりができる、を挙げておられましたね。

①については保育は発達を通して子どもの中に遊びや文化を創造していく科学（学力の基盤）であるということです。「何歳になったら～ができる」という知識や発達診断ができるというだけでないわけですね。保育や幼児教育を作り上げていく際にはこの視点が必要です。②、③についても大切にしてほしい視点です。付け加えるとしたら、発達の「オドリ場」（発達の節目）の中で、行事、イベント、図書館まつりなど「遊び」と「文化」について学ぶ機会を学生に保障していかないと、詰め込みの教育では大変と思います。

—これからの生き方で考えていることはありますか？

研究を続けていこうかなあとということで、①北朝鮮の障害者問題、②ベトナムの高齢者介護の問題、③自閉症の問題、そして④高齢化率30%の京都市東山区（私の地元人口約4万人）のまちづくりの源流をさぐる研究⁵⁾ ⑤老人の発達サークルをやっけていこうと考えています。

『北朝鮮の日常風景』⁶⁾（石任生 撮影）という写真集を見ていたら、1998年に撮影された写真で「はしかで目が見えなくなった子ども」という目の不自由な子どもが竹の杖をついている写真があったんです。その本によると「北朝鮮では医療施設が劣悪で、薬品も不足しているために、はしかにかかっただけで亡くなったり、目が見えなくなったりすることもある」⁶⁾ それと『私の娘を100ウォンで売ります』⁷⁾ という詩集の中で、売春宿に娘を売る聾啞者のお母さんのことを脱北者の詩人が詩にしているんですね。それがきっかけで現代の北朝鮮の障害者問題に関心を持ちました。これから脱北者を通して北朝鮮の調査を試みようと思っています。

そこに興味や関心を持ったのは、ベトナムもそうですが、アジアを侵略してきた日本の戦争責任があると感じていたからです。今は調査資料などを調べています。本当は現地に調査に行きたいんですが、家族の反対もあります（笑）。

自閉症のことも、学部有的时候に「自閉症」ということがばか辞書になかったんですよ。学術論文にはありませんでしたけど。助手の先生にも「そんなん知らん」て言われて。僕らが「自閉症の教育権を保障しろ」といったら、「自閉症は医療の対象であって教育の対象ではな



《石任生撮影『北朝鮮の日常風景』(コモンズ、2007年)》

い」と言われた。一方で、お医者さんには「俺ら何にもできへんで。注射もできないし手術もできないから」と言われて。また「怒り」を感じて、「これはみんなの問題にせなあかん」と思いました。

その中で僕らが、学校教育を受けた自閉症児と、受けていない自閉症児に分けて調査したら、やっぱり学校教育を受けてる子はよく伸びてるんですね。僕らは発達というよりも全ての子どもの教育権(憲法の理念)を保障しようということで運動を展開しました。今は早期発見・早期対応で自閉症児の姿も変化してきましたが、そこを成果と見るのかということは難しい問題で、今後さらに京都の全障研で、自閉症サークルをやらうと呼びかけています。(第1回目は「自閉症児の教育—TEACCH批判—2008.10.10」⁸⁾)

(9月15日 京都の藤本先生ご自宅にて)

鈴虫のなく館で、およそ2時間にわたるインタビューでした。文中に(笑)がたくさん出てきたように、笑いが絶えず、インタビューした私たちも、本当に楽しいひと時を過ごさせていただきました。

インタビューをまとめるにあたって、藤本先生の「怒りが学問の出発点」、「野人的にやっていく」、「絶えず現場から学ぶ」ということばに改めて感動し、学問が社会に果たす役割について考えさせられました。私自身にとっては「実践・運動」と「研究」をともにすると対立的にとらえたり、かと思うと混同してしまいがちな自分をふりかえる機会となりました。

また、定年退職を迎えてなお、『今後の研究課題』を熱く語る藤本先生の情熱に私たちも心が熱くなりました。紙面の都合で割愛せざるを得なかったエピソードもたくさんあり、残念でした。

後日いただいたお電話で、「インタビューのあと、カーッと熱くなって研究会を早速3つも立ち上げたよ」とおっしゃる藤本先生にまたびっくりさせられ、「『床に臨む』とはまさにこのことだ、自分ももっとがんばらねば」と思い、励まされました。

脳梗塞を起こしたときのCTまで見せていただき、「僕はいつも運がいいんだ。倒れたらたまたま神経内科の専門の先生が当直だった」とおっしゃっていましたが、倒れないようにお体を大切になさって『今後の研究課題』に取り組んでください。藤本先生、ありがとうございました。

インタビュー 小坂淳子(本学教授)

野村 朋(本学講師)

追記(藤本)私の発達の「おどり場」の提起は湯浅誠氏の貧困の「溜め」池論の提起とつながると思う。⁹⁾古くは、Ego Psychology Regression in the Service of Ego (B.Klopper) を思い出す。¹⁰⁾

【注】

- 1) 藤本文朗退官記念論集編集委員会編 2000 『座して障害者と語る』文理閣
- 2) 藤本文朗 2008 「私の研究の歩みをふりかえって」創発第7号 pp.213-217
- 3) トラン・トフ・ハー 2008 「ベトナムの発達障害児の治療教育の現状と課題」東アジアの発達障害のための治療プログラム開発に関するシンポ発表
- 4) 高野哲夫・藤本文朗編 1981 『戦争と障害者—ベトナムからの証言』青木書店を出版
- 5) 藤本文朗 2009 「東山の福祉と革新の源流をさぐる—なぜ私たちはこの会を発足させるか—」懇談会ニュースNo.1
- 6) 石任生 撮影 安海龍 文 2007 『北朝鮮の日常風景』コモンズ p94
- 7) 張真是 2008 『私の娘を100ウォンで売ります』晩聲社
- 8) 藤本文朗・松尾隆司・森下勇 2009 全障研京都支部「自閉症の教育」サークルからの報告『障害者教育科学』No.58
- 9) 湯浅誠 2008 『反貧困—「すべり台社会」からの脱出』岩波書店
- 10) Developments in the Rorschach techniquo [by] Bruno Klopfer [and others] World Book Co. [1954-70]

藤本文朗先生 教授履歴

【学歴】

- 1958年3月 京都市立日吉ヶ丘高校 卒業
1959年3月 東京教育大学（現筑波大学）教育学部特殊教育科 卒業
1961年3月 京都大学大学院教育研究科修士課程 教育方法学専攻（臨床心理学）修了

【職歴】

- 1961年4月 大阪学芸大学（現・大阪教育大学）学芸学部助手
1965年4月 福井大学 学芸学部「障害児教育・心理」講師
1967年4月 福井大学 教育学部「障害児教育・心理」助教授
1979年4月 滋賀大学 教育学部「障害児教育・心理」助教授
1981年4月 滋賀大学 教育学部「障害児教育・心理」教授
1989年4月 滋賀大学附属養護学校校長併任
1993年4月 滋賀大学評議員併任
2000年4月 華頂短期大学社会福祉学科介護福祉コース教授
常盤会短期大学専攻科（幼児教育専攻）非常勤講師
滋賀大学名誉教授
2002年4月 大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科I部教授、学科長、図書館長
2006年4月 大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科教授、学科長、図書館長
2008年3月 大阪健康福祉短期大学退職、同短期大学名誉教授

【学位】

- 1961年3月 教育修士（京都大学第65号）
1993年3月 教育学博士（東北大学教54号）

【所属学会】

日本特殊教育学会（名誉会員）、全国障害者問題研究会（顧問）、科学的障害者研究会（代表）、ベトちゃんとドクちゃんの発達を願う会（代表）、アジア高齢者福祉研究会（代表）

【専門分野】

障害児教育

【受賞歴】

- ベトナム社会主義共和国ホーチミン市名誉市民（1985年）
ベトナム社会主義共和国人民健康賞（1995年）
京都オムロンヒューマン大賞（2005年）
ベトナム大統領友好賞（2006年）
ベトナム教育・訓練省の賞（2008年）

藤本文朗先生 研究業績

<著書>

- 『精神薄弱教育論』 共著 1970 日本文化科学社
- 『この子らの生命輝く日』 共著 1974.6 新日本出版社
- 『障害児の教育権保障』 共著 1975.9 明治図書
- 『障害児と学校』 共著 1979.10 新日本出版社
- 『精神薄弱児教育論』 共著 1979.10 文化科学社
- 『障害者に住みよいまちを』 共著 1980.8 全障研出版部
- 『障害児教育学入門』 共著 1981.4 青木書店
- 『戦争と障害者—ベトナムからの証言—』 共著 1981.9 青木書店
- 『障害児と教育課程の指導法』 共著 1981 総合労働研究所
- 『障害者の発達と教育的環境』 単著 1982.8 青木書店
- 『自閉性障害児の発達と教育』 共著 1982.9 青木書店
- 『障害児教育』 共著 1983.3 あゆみ出版
- 『完全参加をめざす教育』 編著 1983.7 全障研出版部
- 『障害児教育実践体系』 共著 1984.3 労働旬報社
- 『笑顔でかたる子ら』 共著 1984.7 青木書店
- 『障害児のための教育課程』 共著 1984 労働旬報社
- 『障害者の寄宿舍教育入門』 編著 1985.6 青木書店
- 『障害児教育をどうすすめるか』 編著 1986.7 青木書店
- 『障害児教育とインテグレーション』 編著 1986.9 労働旬報社
- 『Cheer up Viet and Duc』 編著 1987.4 かもがわ出版
- 『放課後の障害児』 編著 1989.8 青木書店
- 『青年期の自閉性障害』 編著 1989.8 青木書店

- 23.『発達診断と障害児教育』 編著 1989.8 青木書店
- 24.『障害児教育の義務制に関する教育臨床的研究』 単著 1989.8 多賀出版
- 25.『瞳輝いて』 編著 1990 全障研出版部
- 26.『京都障害者歴史散歩』 共編 1991.8 文理閣
- 27.『障害児教育の現状・課題・未来』 共編 1993.2 培風館
- 28.『奇跡のいのち—ベトちゃんドクちゃん物語』 共著 1992 新日本出版社
- 29.『ベトちゃんドクちゃんだけでなく』 編 1996.8 文理閣
- 30.『障害児教育学』 共著 1997 全障研出版部
- 31.『障害者家族のノーマライゼーション』 共著 1999.1 群青社
- 32.『青年期の進路を拓く』 共著／監修 1999.2 かもがわ出版
- 33.『父母と教師が語る自閉性障害児者の発達と教育』 共著 2000 クリエイツかもがわ
- 34.『ベトちゃんドクちゃんだけでなく』 編著 1996 文理閣
- 35.藤本文朗退官論文集『座して障害者と語る』 共著 2000.3 文理閣
- 36.『自閉性障害児の発達と教育』 共編著 2000 クリエイツかもがわ
- 37.『障害児教育学の現状課題将来』 編著 2000 培風館
- 38.『「大阪府」庶民の街「大阪」の実状と個性的取り組み』 共著 2003 かもがわ出版
- 39.『胎動するベトナムの教育と福祉』 共編 2003 文理閣
- 40.『キーワードブック障害児教育—特別支援教育時代の基礎知識』 代表編集 2005 クリエイツかもがわ
- 41.『障害児教育学の現状・課題・将来（改訂版）』 共編 2006 培風館
- 42.『手づくりの国際理解教育—ベトナム障害児スタディーツアー—』 共編 2008 クリエイツかもがわ

<訳本>

- 1.ロジャース「パーソナリティの理論」 共訳 1969.8 岩崎出版
- 2.エル・エス・ビゴッキー「子どもの発達における遊びとその役割」 共訳 1971 国民教育9

<論文>

- 1.「内外因精神薄弱児の知覚行動の相違」 単著 1959.4 ロールシャッハ研究Ⅱ
- 2.「ロールシャッハテストによる精神薄弱児の人格診断」 単著 1960.6 児童精神医学とその近接領域
- 3.「ある非行精神薄弱児のロールシャッハ・テスト反応と心理療法」 単著 1961.12 ロールシャッハ研究Ⅳ
- 4.「精神薄弱児の人格発達に関する研究Ⅱ」 協力執筆 1962.3 京都大学教育学部紀要
- 5.「非行精神薄弱児の集団心理療法に関する研究」 単著 1964.10 大阪学芸大学紀要
- 6.「学校カウンセリング批判」 単著 1965.5 単著 1965.2 大阪学芸大学紀要 雑誌「生活指導」に転載
- 7.「頭部外傷の精神医学的研究」 共著 1965.5 精神神経67-5
- 8.「頭部外傷者の人格変化Ⅰ・Ⅱ」 共著 ロールシャッハ研究
- 9.「戦後日本の知的障害児観の変遷」 単著 1965.10 精神薄弱問題史
- 10.「心身障害のため不就学とされた障害児の実態」 単著 1966.10 福井大学教育科学紀要
- 11.「日本の戦後障害児教育政策の動向」 単著 1967.4 福井大学教育科学紀要
- 12.「都市における心身障害児の実態の精神医学的研究—とくに重症心身障害児について—」 共著 1967.8 福井大学教育科学紀要
- 13.「福井における障害者運動」 単著 1968 住民と自治 59号
- 14.「障害児の教育権保障の実態と運動」 単著 1969 教育学研究36-1
- 15.「ちえ遅れの子にも全面発達を」 単著 1969 精神薄弱児研究 No.133
- 16.「3才児検診と障害児早期発見」 単著 1970.4 福井大学教育科学紀要Ⅳ
- 17.「新興教育と障害児教育に関する研究ノート」 単著 1971.8 精神薄弱問題史Ⅴ
- 18.「障害者の生活空間と発達保障」 共著 1973 建築雑誌1084号
- 19.「不就学障害児の死亡例の実態調査研究」 単著 1974.12 教育学研究41-1
- 20.「障害児の発達保障と障害児教育制度について」 単著 1974.12 児童精神医学とその近接領域18-3

21. 「障害者の発達と生活空間」 単著 1974.12 福井
大学教育科学紀要Ⅳ -24
22. 「最近の障害幼児の保育・教育における論点」 単著
1974.12 児童精神医学とその近接領域14-4
23. 「日本児童精神医学学会の現状と課題」 単著
1974.5 障害者問題研究2
24. 「福井における障害者教育研究ノート」 1975.3 福
井大学教育科学紀要Ⅳ -25
25. 「まちと障害者の歴史」 単著 1975.12 障害者問
題研究5
26. 「障害児の発達と教育空間研究序説」 単著 1976.3
福井大学教育科学紀要Ⅳ -26
27. 「障害児の発達と教育環境論」 単著 1977.3 福井
大学教育科学紀要Ⅳ -27
28. 「重症心身障害児の発達と養育空間づくり」 共著
1978.5 障害者問題研究14
29. 「信楽の障害者の人格発達に関する研究Ⅰ」 単著
1979.3 滋賀大学教育研究所紀要13
30. 「信楽の障害者の人格発達に関する研究Ⅱ」 共著
1979.7 滋賀大学教育研究所紀要17
31. 「教育相談と地域研究Ⅰ」 共著 1980 滋賀大学教
育研究所紀要14
32. 「教育相談と地域研究Ⅱ」 共著 1981 滋賀大学教
育研究所紀要15
33. 「教育相談と地域研究Ⅲ」 共著 1982 滋賀大学教
育研究所紀要16
34. 「障害児教育におけるインテグレーションの系譜と
動向」 単著 1983.7 障害者問題研究32
35. 「自閉症児の研究(1)」 共著 1983.7 障害者教
育科学
36. 「教育相談と地域研究Ⅳ」 共著 1984 滋賀大学教
育研究所紀要16
37. 「「岩倉村と障害者」研究ノートⅠ」 単著 1984.7
夜明け8
38. 「「岩倉村と障害者」研究ノートⅡ」 単著 1985.12
夜明け9
39. 「教育相談と地域研究Ⅳ」 共著 1985～87 滋賀
大学教育研究所紀要17～19
40. 「全土解放10周年をむかえた障害児教育 上・
中・下」 単著 1985～87 障害者教育科学
11.12.13
41. 「ベトナムのろう教育(Ⅰ)・(Ⅱ)」 単著
1986.10 ろう教育科学
42. 「てんかん児の医療と教育」 共著 1986.10
特殊教育学研究24-2
43. 「岩倉村と障害者」 単著 1987.12 障害者問題研
究44
44. 「わたしの研究ノート 教育臨床的アプローチをさ
ぐる」 単著 1987.3 障害者問題研究48
45. 「養護学校卒業生の進路実態調査研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」
共著 1988～89 障害者教育科学15.16.17
46. 「養護学校卒業生の進路実態調査研究Ⅳ」 共著
1989.7 障害者問題研究48
47. 「自閉性障害研究の到達点」 単著 1989.6 障害者
問題研究57
48. 「運動機能障害と図形表現システム」 共著 1991.5
障害者問題研究65
49. 「再び教科学習か生活単元学習か」 単著 1992 発
達障害研究13巻4号
50. 「ベトナム、ベンチュエ省の障害児実態調査報告」 共
著 1992 障害者問題研究68
51. 「日本—ベトナム友好障害児教育セミナーの経過と
成果」 共著 1994.8 障害者問題研究22(2)
52. 「ベトナムの障害児教育を足でさぐる」 共著 1995
日本の科学者
53. 「歴史のなかの教師像 西川吉之助の生涯と口話式
聾教育運動」 共著 1995.2 障害者問題研究22(4)
54. 「障害児教育の教師教育に関する研究(1),(2),
(3)」 1995.7.9 滋賀大学教育学部教育実践研究指
導センター
55. 「教師教育(講座発達保障①障害者教育学) 全障研
出版部 1998
56. 「Research on Handicapped Children in the Area
of Kumuro Kuachi in Vietnam」 単著 1998.3 滋
賀大学紀要
57. 「ベトナムにこだわって19年の交流」 単著 1998.4
障害者教育科学
58. 「障害者理解の国際比較の研究(Ⅰ)」 共著
1998.4 滋賀大学生涯学習センター紀要Ⅰ
59. 「障害児教育の教師教育に関する研究(3)」 共著
1999.3 滋賀大学教育実践研究センター紀要
60. 「韓国における障害者理解の調査研究」 共著
1999.9 滋賀大学教育実践研究センター研究集録
1999-Ⅰ
61. 「老人性痴呆に関する研究」Ⅰ,Ⅱ 単著 2000,
2001 華頂短期大学研究紀要45,46

62. 「アジアの障害者問題とその運動をさぐる」 単著
2000 障害者問題研究28-1
63. 「発達保障論と環境問題をめぐって—私の研究のあゆみを通して」 2005 障害者問題研究第33巻第3号
pp.224-230
64. 「ベトナム社会主義共和国（ドイモイ期）におけるソーシャルワークの導入」 単著2006.3 大阪健康福祉短期大学紀要『創発』第4号 pp.15-19
65. 「ベトとドクの発達に関する事例研究（Ⅰ）—「健康な」結合双生児時代—」 単著2007.3 大阪健康福祉短期大学紀要『創発』第5号 pp.25-34
66. 「今もベトナム研究を」 単著 2005 障害者教育科学No.50
67. 「日越友好高齢者介護セミナー開会の挨拶. 閉会挨拶、開催して」単著 2007『創発—第一回日越友好高齢者介護セミナー特集』pp.4-5、4の53-54
68. FUJIMOTO Bunro 『Hội thảo hữu nghị Việt-Nhật về chăm sóc người cao tuổi lần 1 năm 2006』
Số1-2008 THÔNG TIN KHOA HỌC VÀ NGHIỆP VỤ
pp.104-105

<その他>

1. 発表「ベトナムにおける障害者理解の発展」 単著
2001 第10回日越友好障害者福祉教育セミナーでの記念講演
2. 発表「日本における、枯葉剤被害の研究」2007 枯葉剤被害の国際セミナー（於ホーチミン市）
3. 精神鑑定 1995 京都裁判所より依頼
（聴力障害者の責任能力鑑定）

出典：藤本文朗退官論文集『座して障害者と語る』
2007年度 大阪健康福祉短期大学教員総覧などより
整理